

要約

北方の森のウッド・エルフの里生まれ。ドラウにより故郷を滅ぼされた。

父:エボニース・オルキエル(ウッドエルフ)⇒故

母:カリナ・オルキエル(ウッドエルフ)⇒故

妹:ナヤ・オルキエル(ウッドエルフ)⇒生死不明

ラスカン酒場で働いた後、ラスカンの内科医で薬剤師をして内科医に嵌められて投獄。

酒場の店主:ウィリアム(ヒューマン♂50代)⇒故

内科医:ファース(ヒューマン♂30代)⇒80歳くらいかな生死不明。

出所後は南へ町や村を点々とし、ウォーターディープ近郊の村でハーフエルフの兄妹に出会い

妹の方の命を救い、3人でウォーターディープへ移住。賃貸に住む。

薬売りを再開、ハーフエルフ兄は傭兵、妹はエボニスの助手として働く。

父:シェリー・コットンバーグ(ヒューマン30代)→生きてたら50代程度

母:メルシャ・リースト(ウッドエルフ)→故人

兄:デラフト・リースト(ハーフエルフ)→傭兵(冒険者)

妹:マリー・リースト(ハーフエルフ)→エボニスの助手

ペット:ポコ(子豚)

借金取り:未設定

店のお得意様:未設定スキーモ・ウィアードボトル(ノーム♂)

妹の悩みの種である、兄の様子を見る為に、大口亭に行き、成り行きでPC達と合流した。

設定本文(生誕→現在)

今は無き君の故郷は北方の森の中にあり、少数ながら森を守り動物たちと暮らしていた。

オルキエル一族に生まれた君は父に似て生まれつき肌が褐色だった為、父が自分の名前の綴りを取り「エボニス」と名付けられた。

ウッド・エルフの父と母は人間を嫌い、子供だった自分が森の外に出たいと言ったら厳しく叱られた。

森に人間が訪れる事もあったが、その人間には矢で威嚇して森から追い払っていた。

君には1人のナヤと言う妹がいた。自分達もいずれ成長したら、父と母の様に森を守る様になるのだとそう思っていた。

この集落には年に一度の祭りがある。森の女神マイリーキーの神事だ。

この日だけは皆緊張もほぐれ、好きな食べ物などを口にして神への祝福を捧げていた。

父と母も珍しく葡萄酒を飲んで、二人きりの時間を楽しんでいた夜の事だ。

君はチャンスだと思って、妹を連れ出して森の外に行こうと誘った。

初めて森の外に出て、山に登った君は、遠くにいくつもの明かりが見える事に気づいた。

「あれは何?」「きっと、ヒューマンの光だ」

エルフ語で話をしながら、その光に目を奪われていると、近くでガサリと音がした。

獣かと思って身をかがめていると、そこに現れたのは真っ黒な肌のエルフだった。

「この辺りから声がした」「**邪悪な者が近くにいる。必ず探し出して捕らえよ**」

リーダーの真っ黒な肌の女エルフに言われるまま、闇の中その赤い瞳を光らせるその姿が
たまらなく恐ろしくて、妹と二人で茂みに隠れていた。

やがて彼らは、山のふもとにある集落から上がる宴の煙に気づき、そちらに向かっていった

「兄さん、あの人達、パパとママのところに行ったよ」「・・・」

君は決断できなかった。「教えにいこう」と妹が袖を引っ張ったので、あの人達に気づかれぬように回り道をしながらいで戻った。

だが遅かった。

君が森の中を歩くにつれ、血と錆と焦げ臭い臭いが鼻についた。

森の中から上がる悲鳴。剣戟音。そして、炎。

「**邪悪な者共を殺せ!**」あの女エルフの声だ。行っちゃダメだ。君はそう思ったが

妹は走り出す、君も妹を追いかけて走り出した、妹はきっと、父と母を連れ出して一緒に逃がそうとした
かったのだと思う。

無理だ。だって、もう、僕らの家の方向はとっくに・・・

「キャアアア！！」前から聞こえる妹の悲鳴。近づいてくる数人の足音。

君は身をかがめた。気づかれてしまう。震えながら茂みと一体になる。木の枝や棘が刺さり、酷く痛い。妹がこちらに逃げてくる足音がする。でも、それが止んだ。

「抵抗する者は殺せ！あとの者は捕らえよ！」「やったか？」「これで全員か」

荒々しく息を吐く真っ黒な肌のエルフたちは、茂みに隠れる君を残し、足音が遠くなる。

その日の朝その森にいたのは、君たった一人になっていた。妹はどこにもいなかった。

君はあの時見たヒューマンの光に向かって歩き始めた。

そうして辿り着いたのがラスカンの町だった。

ラスカンの町ではヒューマンの海賊たちが幅を利かせ、酒場ではいつも怒号や喧嘩が起こっていた。君はラスカンの町の路地に倒れていた所を、酒場の主人が拾い

人手が足りなくなっていた酒場の従業員として働かせてくれた。

賃金はもらえなかったが、共通語が分からなかった君にまず最低限の共通語を身振り手振りで教えてくれた上、衣食住の面倒はみてくれたおかげで、君は何とか暮らす事が出来た

「黙ってばっかりの陰気なエルフの客引きがよ！」「男娼に行った方がよっぽどお似合いだぜ！」

酔っ払いにビール瓶で頭を殴られたり、唾を吐きかけられたりしても君は文句のひとつも言わずに生きてきたのは、あの日の罪悪感があったからだ。

自分が妹を引き留めていれば、妹は助かったはず

自分が山に登って騒いでいなければ、あの真っ黒な肌のエルフは集落に気付かなかったはず

自分が仲間のウッド・エルフを皆殺しにしたのだと。

数年後、君が今の姿になるまで成長したころ、酒場の主人はそんな陰気な君を見かねて

「何か欲しいものはあるか」と尋ねた。

「欲しいもの・・・」「欲しいものも無いのか」

今まで君は言われた事だけやってきた。自分の欲を聞かれた事は一度だってなかった。

それに自分の欲のせいで一族が殺されてしまったのだから、そんなもの言えるわけがなかった

「めんどくせえ。エルフだから客引きになるかと思って置いてやっていたが、いい加減その陰気な顔にもうんざりしてきたんだ。金をやるから好きにしろ。お前を雇うのは今日で最後だ」

これは主人の気遣いだと、今になって思う。

君は昔、集落で習った植物の知識を使い、自分が出来る事から始めた。

近くの森から、酔い止めになる植物の根を取ってきては主人からもらったお金で道具を買い

酒場の近くで、酔っ払いに二日酔いに効く酔い止めの薬を配って回る事から始めた。

酒場の周りで酔いつぶれて寝た男達の面倒を見ていたのは君だったからだ。

最初はなかなか信じてはもらえなかったが、試しに飲んでみた男が周りに広めたせいで

その噂がラスカンの薬売りの元に届き、君はすぐにその男の助手として働く事になった。

「薬をロハで配られると困るんだよ。それに君は資格もないだろう。君が配ったのがまだ数人だったし、種類も酔い止めの薬だけだったから大きな問題にならなくて済んだが、あのまま配り続けていたら、君は牢獄送りにされてもおかしくなかったのだよ」

その薬売りはファーススという。ファーススは君の事が嫌いだったが、薬草学に詳しく君の助力は店の売り上げに大きく貢献した。

そのうちファーススの店の評判よりも、助手の君の評判の方が高くなった事を感じたファーススは、君を政治的に追い出す為に嘘の仕事を申し付けた。

「お得意様が痛み止めに100個御所望している。この種類の薬草を使って、君が処方するのだ」

君はこの種類の薬草がヒューマンにとっては効きすぎる様な気がしたが、余程つらい痛みなのだと解釈し、言われた通りの痛み止めに処方した。

だがそれが罠であった。

薬を届けたのがファーススと懇意にしているお得意様の貴族で、元々その貴族はファーススが処方した痛み止めを服用していたが、エボニスが届けた薬の効き目が強すぎたせいで

最初こそ「とても気分が優れて良い薬だ！流石はエボニス君が作ってくれた薬だ！」と

目をキラキラ光らせていたが、やがて重度の幻覚症状や中毒症状を発症してしまった。

それ以降、お得意様は同じ薬をエボニスに多額の金を払って処方してもらい

その噂も瞬く間に広がり、エボニスに対して同じ薬をと注文が殺到した。

やがて何十人もの薬物中毒者を出してしまった事で、エボニスは通報され衛兵によって捕らえられた。

ファーススは建前上、管理不足などと言っていたが、今思い返せば最初の注文が自分を貶める為の罠だったのだと気づいた。

君はラスカンの麻薬売り等と汚名を着せられて、長い間牢獄の中で過ごした。
今までの暮らしも決して贅沢なものではなかったの、牢獄の中での30年は苦ではなかった。
むしろ、あの日の罪をここで償う事が出来るのなら...とさえ考えながら模範的な囚人として刑期を終え、出所した。

ラスカンに君の居場所はなく、君は南へと歩き始めた。
君の悪名は30年経ってもまだ、薬売りの間ではそれなりに語られており
それは大都市、『ネヴァーウィンター』まで広がっていた。
出所した際に渡された君の資金も底をつき、1人のウッド・エルフの野伏りとして自給自足の生活を余儀なくされた。

そうして、いつしか薬売りを見るや否や避けるようになっていた君は各村を点々とし
薬売りがおらず、1人のウッド・エルフとして珍しそうに見られただけで済んだ
ウォーターディーブ近郊の村に腰を落ち着かせたのは当然の事だっただろう。
「持ち金が無くなってしまって、この村で仕事をしたい」
君がこの村での仕事を手伝うと提案すると、村長は喜んで受け入れてくれた。
その日の晩に、村長からロングボウを渡された君に任された仕事は、村の警備だった。
「私は以前、薬売りをしていました。良ければ村医者として力になれば良いのですが」
という君の提案に対しては村長からは厳しい顔をされて

「いや、今はやっと落ち着いてきているがこの村も大変だったのだ。

昨年の冬にオークの一団の襲撃があつて、わしの様な村の老人や子供は見逃してくれたが、見回りの若い衆やエルフは男女問わず皆殺しにされた。

 あいつらはエルフの耳や白い肌を戦利品として持って帰る。この村にもエルフはいた。

 見た目こそ美しかったが、ネヴァーウィンター森出身でヒューマンの男と恋に落ち、里を抜けたという変わり者が1人な。

 オーク一団は今じゃウォーターディーブの傭兵団が討伐してくれたようだが村には今でもオークによる傷跡が残っている。

 だからどうしても今は村の見回りが人手不足だ。オークの脅威は去ったが、お前さんの様に色んな者がこの村に来るからな」

君は自給自足の生活を経たかいがあり、弓の腕は一人前だった。

弓を携える姿は、不本意ながら村に来るならず者共を追い払う事に一役買ってくれていた。

エルフの弓の脅威は、子供だって知っているのだから。

君は見張り仕事の手隙時間に薬草等で様々な薬を作り、村人に分け与える日々を過ごす
事村人の信頼を得るに関しては、さほど時間は掛からなかった。
だから見張り中の君を掴み、頼る者が現れる事も自然な事だった。
それは銀髪のヒューマンの子供だ。いや、ヒューマンにしては耳が少し尖っている気がする。
この村にはエルフはいないはずだ。混血の者か？

「お願いだ！妹を助けてくれ！あんた、薬を作るんだろ！」

時間が止まった気がした。その子供の姿が、あの日の自分と被ったからだ。

子供に腕を引かれ、家を訪れると、ベッドの上で汚れた濡れ雑巾を額に置かれた銀髪のヒューマンの娘が吐瀉物に塗れて息も絶え絶えで喘いでいた。

「ひどい処置の仕方だな」「なんだと！」「下がっている」

病人に対する乱暴な処置に君は少し苛立ちながらも、すぐにその娘を抱きかかえ、村長から与えられた自分の納屋に入った。後をついてくる少年に

「いつからだ」「夕方から」「何をした」「わかんねえよ」

「二人住まいか」「そうだ」「親は」「親父は出て行った。母さんは死んだ」

「食事は」「畑とか、森から取ってきた野草とか木の実とか茸とか」

「これは病ではない、毒による症状だ」「俺が毒を盛ったっていうのかよ！」

「違う。直近でこの子が口にしたものを全て話せ」「えっと...えっと...」「早くしろ。死ぬぞ」「分かっているよ！うるせえな！」

数年ぶりに話をした気分だ。汚れた娘の衣服を脱がし、汗を拭き、症状を確認しつつ清潔な状態にし、薬剤師道具の中から取っておいた薬の残りを使って解熱等の処置を行った。

...ラスカンの医者でもあったファーシスと、急患の処置を手伝った経験が活きた。彼は薬剤師というよりも内科医の側面の方が強かった。

そして、その子供が話した食べ物の中から毒の検討がつくと「お前は何もするな。そこでこの子を見ていろ」と、近くの森まで薬草を探しに向かった。

君の懸命な処置の甲斐があり、その娘は一命をとりとめる事が出来た。

銀髪の子供―ハーフエルフの妹の方、マリーと言う娘は君にお礼をしに来たが、兄はついで来る事は無かった。

君はその子供達の生活が劣悪極まりない事が我慢ならず、時々家に行っては様子を見ながら毒性のある野草や茸などの知識を教えた。

兄はもっぱら君を家から追い出そうとしてきたが、薬学に興味を示したマリーは、薬を作っている時の君の家に時々訪れてはその作業を眺める日々が続いた。

「兄さんがもっと良い稼ぎ口を探している」

数年が経ち、ハーフエルフの兄―デラフトと言う青年は村の見張りに付く様になり

いつしか君はマリーの相談相手になっていた。

「ならば町に行け」「付いてきてくれないんですか？」「何故」「だって、エボニスは私達兄妹にとって、身内の様な人です」「なった覚えはない」「そんな」「町には二人で行け」

二人には君の悪名の事を話していない。

「私達はずっと村育ちで、エボニスが町で暮らした事があるって前話していたから、兄さんが町に行くなら、兄さんの力になってくれるんじゃないかって。私も、エボニスが一緒なら町でも暮らしていけます」

「...私が行くと―」二人に迷惑がかかると言おうとした自分に気付き、驚いてしまった。

君ならば「君達兄妹と自分とは関係ない」と返し、この少女を諦めさせた筈だ。

「なった覚えはない」も、そういう意味で言ったと思っていた。だが違った。

いつの間にか君の中で、この兄妹が守るべき大切な存在になっていた。その事に気付かせてくれたのは、マリーだった。

君は観念して、マリーに君の悪名の事を打ち明けた。マリーは黙って君の話を聞いたうえで

マリーも父親が残した多額の借金がある事を打ち明けた。

兄妹は、少しずつ借金を返済しているが、利息もあり、一向に減る気配がない。

もっと良い稼ぎ口が必要なのだという。

「その時は、ウッド・エルフの死んだ母に誓って私がエボニスを守ります」

「...必要ない。だが条件がある」

「危険を冒さず逃げる事を考えろ。大切な人を守ろうとするな」

それは、あの日の妹に向けて言っている様だった。やはり重ねてしまっている。

この子に何かあったら、きっとデラフトは自分の様になってしまう。それだけはダメだ。

「守れるなら言う事を聞く。守れないなら二人で行け」「...守ります」

これが本当か嘘かは分からない。そうして妹は兄と話をし、町に行く事を決意した

二人にはエボニスも同行した。村人からは惜しまれたが、快く送り出してくれた。

向かった先はウォーターディーブの町だ。旅に慣れてない二人を長旅に付き合わせるわけにはいかなかった。

町で薬剤師の商業ギルドに登録を済ませた。君の悪名は、あれから50年近く経ったからか

今では影も形もない。それかそもそもこの町までは広まっていなかったのか...

町の商業施設を使い、薬売りとして働く様になった君はマリーが助手として就いた。

ずっと君の仕事ぶりを見てきたマリーは、町の一部の人から人気もあり評判の店にもなった。

ウォーターディーブの人々はラスカンの人々よりもずっと親切で、今ではお得意様になっているノームの男「スキーモ・ウィアードボトル」からは薬剤師ギルドの入会のあれこれ、ノーム語まで教わるほど世話になった。

もちろん、君はマリーに『あの薬』の事は、しっかり教えてある。

兄妹には話していないが、借金取りには君が保証人になり、利息分は君が払っている為、借金は徐々に減っているようだ。どうしてここまでするのだろう。自分でも分からない。

デラフトはと言うと、見張りから傭兵に鞍替えしたようだ。

彼の弓の腕も大したもので、剣の扱いにも長けている様だ。

妹からは反対されていたが、都市警備隊という堅苦しい役職よりも、自由が利くかららしい。

収入もそれなりで、村で暮らしていた頃とは見違えるほど、羽振りも良くなったと思う。

最近尋ねた時は、どこからか拾って来たのか、賃貸の家なのに子豚を飼育している様だ。大丈夫なのか...？

「傭兵稼業だなんて危ない仕事、大丈夫だと思いますか？」
心配しているのはこっちだというのに、マリーは毎日、兄の心配ばかりしている様だ。
君は傭兵と言うものがよく分からなかった。
「知らん。あいつはどこに」「この前聞いた時は、大口亭と言う酒場で情報収集とか...」
「...明日様子を見てくる。店番を頼めるか」「もちろん」
君は店を留守にし、念のために装備を整え、傭兵が集まるとされる、町の酒場『大口亭』に足を運んだ。
デラフトの姿は無い。入れ違いになったか。君は酒場でしばらく待つ事になると
背後から声を掛けて来た者がいた。